

平成27年度事業報告書

平成27年4月1日から28年3月31日まで

特定非営利活動法人河北潟湖沼研究所

1 事業の成果

組織強化の取り組み

今年度は会員の拡大は停滞しており、1名が退会して現在会員数は22名となっている。7名の新たな会員という15年度の目標に対してマイナス1となっている。

この点では、取り組み自体を十分に行わなかったことが問題点としてあげられる。また、事業活動の比重が大きくなり、常勤のスタッフが過密な業務状況となっており、またこうした状況の中に理事長も巻き込まれており、結果として十分な組織活動や先行きをみた活動ができてない。一方で、常勤していない役員や会員における取り組みが進んでおらず、常勤メンバーに余裕がないことから、会員に対してのコミュニケーションが不足してきており、常勤と会員メンバーとの日常の活動状況や意識において乖離が生じてきている。こうした状況を典型的に示していることとして会費の回収の遅れもみられる。

研究・啓発活動の進展

研究・啓発分野の活動として、基本課題検討委員会の開催と研究報告会を実施した。また、研究プロジェクトチームの発足させ、潟と砂丘の循環研究と水辺活動のカーボンオフセット化の研究をおこなった。特に研究報告会では、若手の研究者の報告が多く、内容も豊かであり河北潟湖沼研究所の研究分野の歴史の中でも画期的な出来事であった。研究プロジェクトチームは定期的な活動となっており、研究所発足当初を除いて停滞していた活動が再開することとなり大きな進展があった。しかしまだ会員を幅広く取り込んだ活動にはなっておらず、拡がりを作るところでの課題が生じている。

地域における協働事業の進展

地域における環境保全と地域振興に係る活動の推進のため、地域を構成する多様な組織、多様な主体との協働については、河北潟を取り巻く諸団体に近年の若干の変化があり、特に市民レベルでの取り組みについては高齢化や弱体化の傾向がみられる。また15年度になって河北潟の水辺を守り隊の活動や外来植物対応方策検討会の活動が停止している。それぞれの組織のいずれもが個人に依存する傾向が強く、中心的な個人が業務過重に陥っているために活動が行われなくなったところが大きく、これまでのひずみが表面化してきてい

るといえる。同時に事業活動を行うことを軸としてきた河北潟湖沼研究所と他の市民組織との間の格差が大きくなってきており、常勤職員を持つ河北潟湖沼研究所が突出したようになっているが、必ずしも河北潟湖沼研究所が組織的に強化されているわけではなく協働の分野においてこれまでの体制を代行できるものとはなっていない。また代替することが解決策になるものではなく、現在の枠組みの強化と新たな主体を加えた地域協働の枠組みづくりを展望し、その中での河北潟湖沼研究所の役割を明確にしていく必要が出てきている。

事業活動・助成金活動の進展

<地球環境基金助成事業>

26年度に引き続き、「カーボンオフセットの活用を展望した協働による水辺と農地の保全活動の推進」として、Jクレジット制度における河北潟の水辺保全活動のプロジェクト化を目標に、市民参加による協働の推進（こなん水辺公園を中心とした水辺活動、チクゴスズメノヒエ堆肥生産とこれを利用した野菜生産、砂丘地農家への堆肥普及、水田環境保全のための協働による米作り等）、企業・行政・市民・農業団体との連携の構築、水辺保全活動による環境改善効果について調査等の活動を継続している。

28年度も活動を継続し、28年度中にJクレジット制度にプロジェクトを登録申請し、プロジェクトを起動することを目標にしている。具体的には除去した外来植物・チクゴスズメノヒエを、埋め立て処理から堆肥化することによる温室効果ガス削減についてのプロジェクト化を目指している。

課題としては、活動により削減される温室効果ガスの量的な問題があり、削減量がある程度まとまった量でないと登録審査自体が難しくなる。この課題をクリアするためには自治体、あるいは企業等との協働が必要となる。現在は、金沢市等に働きかけを行っているところである。

<アクト・ビヨンド・トラスト助成事業>

3年目となったアクト・ビヨンド・トラスト助成の取り組みとしては第一に生きもの元気米の販路の拡大として、ロハスフェスタ（東京光が丘）、アースガーデン（東京代々木公園）にて販売活動を行った。第二に生産拡大として集落営農へのアプローチを行ったが、今のところ集落営農での取り組みはできていない。

<カーボンオフセット補助金事業>

カーボンオフセット商品を開発する補助金に対して3件応募し、そのうちカーボンオフセットつき生きもの元気米と生きもの元気米ギフトセットの2件が採択され、それぞれ50万円の補助金で、東京方面で4回の販売活動を行った。また商品として生きもの玄米玄米がゆレトルトパックを開発した。

<こなん水辺公園救援隊>

金沢市から、こなん水辺公園救援隊の活動に対して30万円の助成を受け、月2回のペー

スで救援隊の活動を継続した。今年度のおもな取り組みとしては、廃材を利用した椅子づくり、休耕地での里芋づくり、水路の草刈り、ヨシ舟乗船会を10月の河北潟自然再生まつりにおいて実施した。

活動日数：20日

活動参加人数：のべ224名

また、こなん水辺公園への解説員の派遣は引き続き行っている。

自主事業について

<生きもの元気米>

昨年度の販売実績にくわえ、春先にグリーンピースジャパンの協力をいただき、インターネット上にて早期予約注文を受け付けたことにより、契約農家および生きもの元気米の水田面積を増やすことに成功した。

	平成26年・2014年	平成27年・2015年
水田面積	10,834 m ²	19,344 m ²
水田枚数	4枚	7枚
参加農家数	4軒	6軒
契約量	1,620kg	4,950kg

生きもの元気米のこだわりとして田んぼトレーサビリティのしくみがあるが、田んぼ一枚ずつに田んぼコードをつけ、消費者がインターネット上でお米から田んぼの情報を確認することができるように整えた。消費者が田んぼの情報を確認して、田んぼを選ぶことができ、田んぼの生きものの変化を追うことができる。また、生きもの元気米の認証マークに田んぼコードをつけ、袋一枚ずつに番号をつけ、ロットで管理できるように整備した。

運営体勢がまだ十分でないことから、生物調査結果の情報更新が遅れたり、ロット番号の記録に抜けがでていたが、トレーサビリティの中身（生きもの情報の更新やロット番号管理）に信頼性をもたせることが今後の重要な課題である。

2014年度の赤字計上から買取・販売価格の見直しをおこなった。2015度も生きもの元気米は完売したものの、イベントでの売れ残り品、仕入れた生きもの元気米の一部に臭いがついて一般向けに販売できなかったなどで、販売にかかる直接経費を差し引くと収益は18万円にすぎず、販売人件費、認証にかかる人件費（調査費・広報費）を捻出できていない。

2016年度は、無駄を省く対策をたてることで解消される見込みもあり、買取価格、販売価格ともに現状を維持する予定となった。ただし早期予約の割引価格は、価格変更前から割引したものであったため、昨年度よりも値上げした。

販売状況としては、早期予約注文による購入者が75名であった。イベントや委託販売を除いた記録のある購入者は126名となっている。関東方面からの注文が多く、東京都のみ

で 40 名であった。

年度末に他事業の予算により、つくば分析センターに依頼して、玄米の残留農薬の検査をおこなった。在庫のない米もあり、検査できなかった田んぼもあるが、以下の 4 つの田んぼの生きもの元気米について、それぞれ 200 の試験項目が調べられた。試験の結果、いずれの水田でも試験対象農薬は検出されなかった。検査した水田では残留農薬などの問題がないことが証明された。

<すずめ野菜>

生産においては、畑の配水パイプを設置でき、配水ホースの使用により、水やりの労力が軽減した。秋には昨年のクラウドファンディングにより購入したローリータンクを配置し、ビニルハウスの上におちる雨水を集水する設備を整えた。



一年を通じて野菜を生産でき、4 月から 12 月までのマルシェでの定期販売に対応することができた。2015 年度に生産した野菜の品種は約 120 種類にのぼった。

すずめ野菜の砂丘地畑での生産に適し、人気のあった野菜を紹介する。

ルッコラ (アブラナ科) コーラルリーフ チンゲンサイ スナップエンドウ 枝豆 シカクマメ ささげ ひもなす 黄とうがらし ズッキーニ 人参 (赤・黄) 丸オクラ ごぼう (大浦太) キュウリ (短形四葉)	 ひもなす	 枝豆
	 コーラルリーフ	 ズッキーニ

販売活動においては、2015 年度のすずめ野菜の売上は、約 50 万円であった。

マルシェの定期開催により、生産量が足りなくらいであった。東京でのイベント販売

では、生きもの元気米の販売に力を入れ、すずめ野菜は客引き用に少量を販売しただけであったが、客の反応は良かった。金沢駅西金曜マルシェ以外に東京のイベントで8回、このうち丸の内のマルシェに4回出店した。そのほか金沢市内では昨年度の「金澤町家巡遊」の会場で会った紙谷漁網店にて5月～12月の毎月2回のペースで定期販売をおこなった。また、金沢駅地下のもてなしドームで開催されたおしゃれマーケットに参加した。

おしゃれマーケット	金沢駅地下	6月
ロハスフェスタ	東京・練馬	9月
アースガーデン	東京・代々木	10月、1月
丸の内行幸マルシェ	東京駅・地下	12月～2月
エコプロダクツ	東京・ビックサイト	12月
町家・紙谷漁網店	金沢市笠市町	5月～12月

<金沢駅西ゆうぐれ金曜マルシェ>

食べ物（農産物）を通したコミュニケーションの場をつくり、河北潟の農地や農産物をPRすることを目的に、金沢駅に併設されている金沢駅西イベント広場を会場に、2015年4月10日（金）より開始した。「ゆうぐれ金曜マルシェ」の名の通り、金曜日の16:00より、ゆうぐれ（18:30ごろ）までの時間帯で開催した。金沢駅西イベント広場を会場に、おおよそ毎月2回（7月のみ毎週）、12月18日までに20回実施した。

このマルシェでは河北潟地域で環境に配慮しながら、あるいはなるべく農薬を使用しないように野菜を生産している農家が、会場にて直接野菜を販売する。農家と都市部消費者とが直接交流できる場を目指している。

27年の売上合計は約73万円であった（全20回、全出店者合計）。冬季は休業し、3月25日より再開した。平成28年については再開日より12月23日まで、毎週金曜日に開催の予定である。複数の来場者の要望により開始時間を1時間早め、15:00開始としている。継続している成果として、常連客がみられるようになった。課題としては、参加農家の確保、集客増加があげられる。

<七豊米>

活動を開始してから4年目となる平成27年は、前年に収穫した種籾より苗を育てた。栽培は協働作業によりすずめ、脱穀作業までの期間にのべ138名で作業を行った（イベント参加者含む）。作業時間は全体で約500時間ほどであった。収穫された米は約560kg、そのうち約320kgは活動資金とするために販売、残りは作業時間に応じて参加者に配分した。

期間中、主に親子を対象とした有料イベントを田植え、観察会、稲刈りと3回おこなった。参加者数はそれぞれ16名、15名、14名であった。

水田内では、これまで見られなかったマルタニシが見られるようになった。

受託事業について

河北潟周辺での環境配慮調査、協働で取り組む干拓地の環境改善にかかる業務等を受注した。

日常活動について

機関紙「かほくがた」は、2015年度に発行すべき21巻の3-4号が未発行となっており、早期の発行が必要である。機関誌「河北潟総合研究」は第19巻が未発行で、現在のところ編集段階となっている。

東北被災地支援について

昨年に引き続き、東日本大震災の被災地支援活動として、河北潟の水辺を守り隊の活動において、被災地支援メニューを行えるように当地（福島県南相馬市）と現地との調整の活動を行った。